

友を死へ追いやった者への憤怒の情が込められている」ことの指摘が、先学より既になされている。「道真梅の会篇『菅家後集』全注釈(二)一〇一頁」その指摘は、①→②→③と三詩を並べること、より明らかにされる。

①・②の詩作品で道真が訴えていたのは、「心を許し会える友」を持ち得ぬ孤独感であったが、それは、③の詩を読むことで、それが道真の「無実」を晴らしてくれることに力になってくれる、又そうしようとしてくれる現世での人間を持ち得ない絶望感であったことがわかる。藤原滋実が呪詛によって非業の死をとげたことが、道真を大きく刺激した。それは、「現世」ではない、「あの世」の人間だからこそ、真情を吐露する作品に仕上がったのだと思う。そして「あの世」の人間に切望するのは、「天の神」への我が身への公平な采配の仲立ちであった。

そして「それがならぬ時は、万策尽きてしまふ」と詠むのは、裏をかえせば、「神はどうして私の無実を晴らしてくれないのか。」「神は本当に存在するのか」という根源の問い掛けに他ならない。

これは、既刊の『道真梅の会篇「哭奥州藤使君」他一編『菅家後集』全注釈(二)』の十二句「繞身帶弦矢」の「弦矢」の典故考察の中で須藤修一氏が投影の濃厚なものとして指摘する、白居易の諷諭詩「哭孔戡」全句(注四)の詩情、とりわけ、31句・32句「茫茫元化中／誰孰如此權(茫茫たる元化の中／誰か此の如き權を執る)」の句内容を強く意識していると考えたい。

このように考察を進めれば、いかに道真が精神的に追いつめられていたのか、そして激情がほとばしるような詩内容になっているのか、自ずと理解できるように思う。